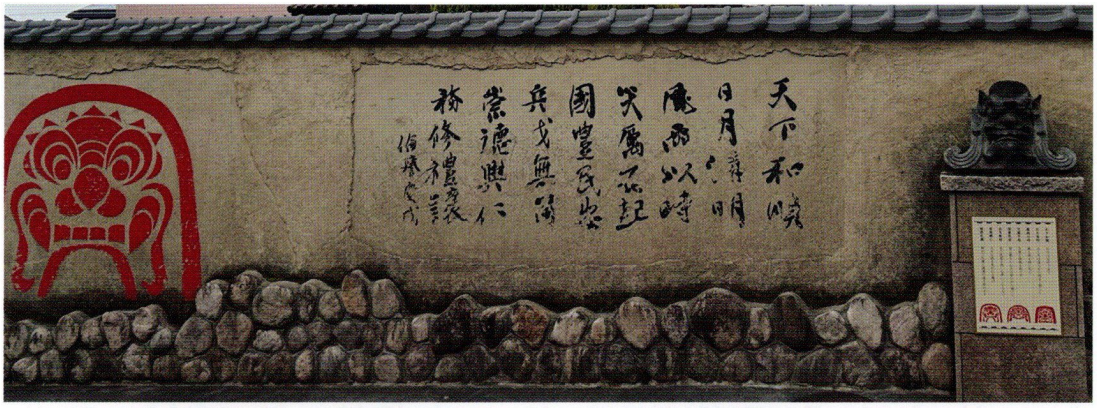
和顔愛語

寺報

令和5年12月号



写真提供：有馬温泉観光協会

天下和順　日月清明　風雨以時　災厲不起

国豊民安　兵戈無用　崇徳興仁　務修礼譲

仏の国とはどんな場所でしょうか。お経によると、そこはどんなところでも救いが届き、天下は太平となり、太陽も月も清らかに光り輝き、程よく雨が降り、心地よい風が吹き、災害は起こらず、病気が流行ることもありません。またその国は栄え、民は安らぎ、武器を使うような場面も訪れません。人々は徳を尊び互いを思いやって、礼儀正しく譲り合って過ごしています。そこは理想の世界です。

その世界を想像したとき、私達が住むこの世界のつらさが際立ってきます。ロシアがウクライナに侵攻して間もなく2年が経過します。今年は中東でパレスチナのハマスとイスラエルが大きな衝突を起こし、ガザ地区の住人は大きな被害を受けています。一方で、日本は数年後に戦後80年を迎えようとするなか、戦後は大きな戦渦に巻き込まれることなく、平和な暮らしを送ってきました。とはいっても、阪神淡路大震災や東日本大震災といった大きな災害を経験し、ここ数年は各地で豪雨による浸水や台風の被害があり、自然の厳しさを目の当たりにする機会が増えています。

戦争が無く、自然も穏やかで、心から安らげる場所はこの世にないのかもしれません。長い間、人々に積もった怨みや怒りは簡単になくならず、争いが争いを生み出し、人の暮らしが自然を傷つけていく。これだからこの世界は穢土と呼ばれているのでしょう。

それでも、理想の世界を諦めるわけにもいきません。私達日本国民は平和主義を掲げる憲法をもち、前文ではその崇高な理念を国家の名誉にかけ、全力で達成することを誓っています。これは戦争の反省を踏まえ、平和のためには一人一人の国民が努力をし続ける必要があることを前提としたものでしょう。世の中をよりよくするためには理想をめざし、それを共有しながら、一人一人がコツコツと努力することが求められます。

冒頭に紹介した、お経に説かれる仏様の世界を示す経文は「祝聖文」といい、「世の中が平和で、人民は安穏であるように願う」ものので、特にお正月に行う修正会という法要でお唱えしますが、日々のお勤めでも読み上げます。お寺では年頭に平和と人々の安穏を祈ります。祈りは現実を変える一つの力、年末年始のお参りでは皆様も自分自身のことだけではなく、世界の平和と人々の幸せを祈ってみてください。その祈りの積み重ねが、いつかこの世を変えるはずです。

生活の中にある 仏教の言葉 ①

私たちが日常で使う言葉には、仏教に由来する言葉が多くあります。なかには、仏教ではまったく意味が異なるものも。このコーナーでは、そんな言葉を紹介していきます。

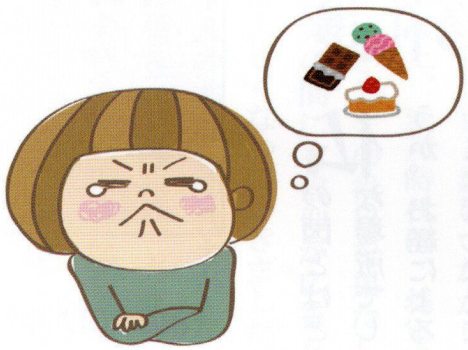
我慢

どんな人でも日常生活のなか、上手くいかないことや納得できないことに出会うことはあるでしょう。自力で解決できたこともあるとは思いますが、どうにもならず「我慢」した経験は誰しも一度はあるでしょう。

このように辛いことを耐え忍ぶ意味で使われる「我慢」。その由来は仏教にあると言われています。仏教の言葉としての我慢は、文字が表すとおり、「自分の心身が不変であると思う強い自我から生まれる慢心」を意味し、思いあがって人を侮る七つの心「七慢」の一つに数えられます。仏教では、我（自分自身）に執着することは、苦しみを生むとしており、我慢もまさにそのような心なのです。

このように強い自我を押し通すために物事に耐える必要があることから、次第に現代の意味になったとされます。

我慢はときに必要なことかもしれませんが、そればかりでは心身が疲弊してしまいます。そんなときは、どうにもならないことや上手くいかないという事実を認め、そして受け入れることで少しは心が軽くなるのではないでしょうか。



退屈

日常がいつも新鮮なことに満ちあふれているという人は少ないでしょう。近年では、SNSなどのメディアを通じて、他の人の生活を目にすることも増え、それを自身の生活の刺激とする人もいれば、一方で他の人と自分を比べてしまい、自分の生活が地味で「退屈」なものであると考えてしまう人も増えているように思えます。

この「退屈」も仏教に由来する言葉。仏教では、仏道修行の厳しさにくじけて気力が減退し、「仏教で目標とする悟りを得ようと志す心が退屈してしまうこと」をいいます。現代の用法は、「心が退き屈してしまうこと」の部分だけが取り上げられたことによるものとされています。

私達は、様々な「退屈」が起こる原因を、他の人や出来事自体などの環境にあると考えがちですが、仏教では退屈の原因は「自身の心の働き」であると考えます。つまり同じ事象に遭遇したとしても、それを「新鮮」と捉えるのか「退屈」と捉えるかはその人の気持ち一つということです。生活のなかで「退屈だ」と感じたときには、一度落ち着いて視点を切り替えてみてはどうでしょう。退屈と思っていたものが、今までにない新鮮なものに見えてくるかもしれません。

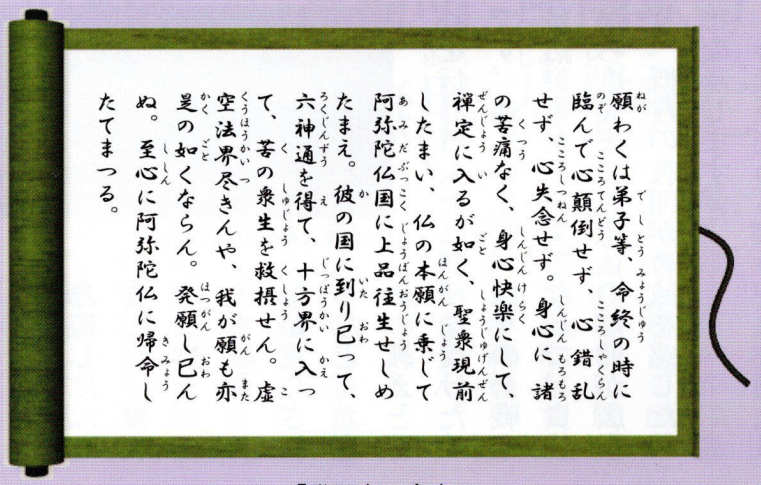
法話シリーズ

伝えたい言葉（13）

彼の国に到り已って
六神通を得て
十方界に入って
苦の衆生を救摂せん
（善導大師『往生礼讃』部分）

〈現代語訳〉
私が極楽浄土に往生した後には、修行を積んで六つの大いなる力を獲得し、この世界に戻って、苦しんでいる者を助けたいです。

人間は死後どうなるのでしょうか――。ある宗教では神の裁きを受けるのを待ち、裁きののちに、楽園で優雅に過ごす者と地獄において永久に苦しむ者がいると考えます。既存の仏教では輪廻（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天界に生死を繰り返すこと）を説き、生きているときの行いに応じて、死後は地獄に落ちたり、虫に生まれ変わったり、あるいは神様の世界に生まれることができるとします。死という私達にとって避けられない現実について、多くの宗教がそれぞれの考えを持っています。そして死んだ後どうなるかについての見解も様々です。


願わくは弟子等、命終の時に臨んで心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず。身心に諸の苦痛なく、身心快楽にして、禅定に入るが如く、聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ。彼の国に到り已って、六神通を得て、十方界に入って、苦の衆生を救摂せん。虚空法界尽きんや、我が願も亦是の如くならん。発願し已んぬ。至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。

「発願文」全文

浄土宗では生きているうちにお念仏をとなえると、この世で生を終えたのち、阿弥陀様のいる極楽浄土に往生すると考えます。死は終わりではなく、命の転換点であり、極楽浄土に生まれ新たな道を歩む始まりです。亡くなった方に戒名を授けるのは、極楽に生まれ変わってこの世と違う新しい道を歩むので、それに相応しい名前が求められるからです。それは新しい名前で、新しい世界を穏やかに過ごしてくださいという一つの祈りです。

往生した方は、その後、自分自身が仏になる修行を始めます。「仏」とは苦しむことなく、自由に生きていける存在のこと。自分自身がその境地を目指していくのが、極楽での生活です。その中で、すごく遠くを見たり、離れた場所の声を聞いたりする能力を得ることができます。これによって往生した人は遥か彼方にあるお浄土から私達を見守り、語りかける声を聞くことができます。それらの能力が大きくなると、往路があれば復路があるように、お浄土から私達の住む世界に戻ってきて、悩み苦しむ人々を助けてくれるのです。冒頭に紹介した善導大師の文章はそれを示すものです。

亡くなった方が修行を進めるのは、自分のためだけでなく、悩み苦しむ全ての方のためでもあります。私達がご法事を務めるのは、極楽で修行を進める方への一つのエール。想いを力に変えて、仏様の世界から現世を見守り、いつか自分自身もそんな存在になります。「死は終わりではなく、新たなスタート」「往生した後は、いつか帰ってくる」これが浄土宗の死、そして死後への考え方です。

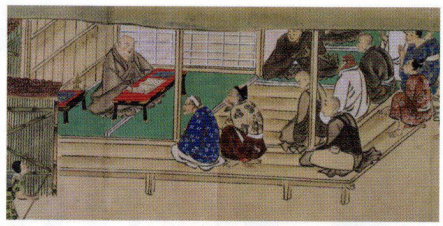
Q&Aですぐわかる！なるほど浄土宗 ⑭

身近な仏教の疑問をQ&A形式で説明します！

―浄土宗が広まった経緯を教えてください。

――浄土宗は承安5年（1175）法然上人が43歳のときに開かれました。法然上人が説いた「南無阿弥陀仏ととなえればどんな人でも極楽浄土に生まれることができる」という教えは、今でこそ普通に受け入れられていますが、当時は誰もがびっくりするようなものでした。それはたくさんの人を惹きつけたと同時に、奈良や京都を中心とする既存の仏教教団から厳しく批判されました。

法然上人も生きている間に還俗させられ、島流しになりました。批判は法然上人死後も続き、お墓が荒らされるなど、お念仏の教えとそれを信じる人々は弾圧を受けたのです。逆にいえば、源平の合戦や自然災害が多発するなかで、貴族から庶民までお念仏の信仰が広まり、既存の教団が脅威を感じたことを示します。



『法然上人絵伝』©CoIBase

時代が変わるなかでも法然上人の教えは、人々の心に残り、戦国時代には徳川家と深いつながりをもちました。江戸時代は、将軍家の菩提寺としての役目を果たし、また民衆の間にも信仰が広まり、教団は大きくなっていきました。法然上人のお念仏の教えがもつ、時代を越える普遍性は、さまざまな困難を抱える方の胸に響き多くの人を引き寄せ、浄土宗が広まっていったのです。

令和六年　年回一覧

令和五年・・・・・・・一周忌
令和四年・・・・・・・三回忌
平成三十年・・・・・・七回忌
平成二十四年・・・・・十三回忌
平成二十年・・・・・・十七回忌
平成十四年・・・・・・二十三回忌
平成十年・・・・・・・二十七回忌
平成四年・・・・・・・三十三回忌
昭和六十三年・・・・・三十七回忌
昭和五十年・・・・・・五十回忌

＊　＊　＊

年回法要にあたられていらっしゃるお檀家様はなるべくお早めにご法事の日程をお知らせください。
ご法事の当日までに、お塔婆をお上げになる方のお名前と、当日いらっしゃる人数をご連絡ください。
また、当日は
・お写真
・お供物（故人様の好物など）
・墓地用仏花
をお持ちくださいますようお願い申し上げます。

普照山　正定寺

■所在地
〒111-0036　東京都台東区松が谷2丁目1-2
■TEL：03-3841-1853　■FAX：03-3841-1777

紫金山　静蓮寺

■所在地
〒110-0004　東京都台東区下谷1丁目12-21
■TEL：03-3843-4034　■FAX：03-3843-3442

母沖山　清見寺

■所在地
〒100-2211　東京都小笠原村母島字元地122

私たちの宗旨

名称：浄土宗
宗祖：法然上人（1133-1212）
開宗：承安5年（1175）
本尊：阿弥陀如来
教え：阿弥陀仏の平等のお慈悲を信じ「南無阿弥陀仏」とみ名を称えて、お浄土に生まれることを願う信仰です。
令和6年は浄土宗が開かれて850周年を迎える年です。